

## 文章産出活動方略と書き手の 自己効力感との関連についての検討

崎 濱 秀 行<sup>1)</sup>

### 問題と目的

近年、大学における日本語運用能力育成の動きが強まっている。これは、コミュニケーションのツールとして言語を使用し、「表現する」ことのスキルを育成することが近年の教育現場において大きな課題となっているからである。富山大学や高知大学のように、早い時期から日本語表現の授業に全学で取り組んでいる事例があり、受講生からも好評を得ているという報告も見られる(向後, 1996, 1998; 筒井, 1996, 1998)。言語表現に関連した授業の中でも、文章表現に関する授業を取り入れる大学は増加の傾向を見せており、今後ともこうした傾向が続くことが予想される。

ところが、文章表現能力の育成がこれだけ必要とされ、大学教育で実践されている一方で、どのような能力を育成するのか、どのようにして育成するのか、という面については、十分な知見が得られているとは言い難い。実際、授業の中身は各担当者に委ねられている場合が多く(吉倉, 1999)、育成すべき能力について、担当者間で統一した見解が得られていないのが現状である。教育を行う上では、これらの側面は要となる部分であり、早急な知見の確立が望まれるところである。その中で、崎濱(印刷中)は、文章産出の際に書き手が持つ文章産出活動方略について14の項目を用いた調査を行い、活動方略として、「伝わりやすさ」・「読み手の興味・関心」・「簡潔性」の3側面が存在することを示した。また、被験者が実際に産出した文章への総合評価を基に、被験者を熟達者と非熟達者に分け、両者の産出活動方略の違いを検討した。その結果、熟達群の場合、「伝わりやすさ」の側面を重視していたのに対し、非熟達群では「簡潔性」の側面を重視していた。すなわち、産出スキルが上昇することで、書き手は「伝わりやすさ」という、文章全体の構成を念頭を置きつつ産出活動を行っていたことが示された。

このように、何らかの問題解決を行う際、非熟達者よりも熟達者の方が、最終的に何をすべきかを考え、その目標に到達するための方法を考える傾向が強いことは、先行研究の中でも取り上げられてきた。たとえば、Larkin, McDermott, Simon, & Simon (1980) は物理学の学習について検討を加え、熟達者の方が非熟達者よりも、最終的に求めるべきことがら何であるかを考え、それに基づいて問題を解決する傾向があることを明らかにした。つまり、熟達群の被験者の方が、自分自身の行動をモニターし、その内容と自己の持つ何らかの基準とを比較して行動を評価し、その結果に応じて自分の行動を統制するという、自己調整的な活動を上手く行っていたことが示されたのである。また、文章産出領域においてもFerrari, Bouffard & Rainville (1998), Graham & Harris (1997, 2000)らが同様のことを示し、学習活動に対する自己調整的活動の有効性が見出された。

上記のような自己調整的活動方略に加え、自己効力感が学習成績に及ぼす影響、あるいは、自己効力感と自己調整的活動方略との関連を指摘した研究も見られる。たとえば、Zimmerman & Bandura(1994)は、産出文章の質を規定する要因について実践現場を用いた研究を行い、文章産出の際の書き手の自己効力感が産出文章の質に影響を及ぼす要因となり得ることを示した。また、Graham & Harris (1997, 2000)は、文章産出過程における自己調整的活動方略と自己効力感は互いに関連しており、共に産出文章の質に影響を及ぼす要因であることを指摘した。

このように、学習活動における自己調整的活動方略と自己効力感との関連を示した研究は見られる。しかしながら、文章産出という領域において、両者を構成する下位の活動方略や下位概念が具体的にどのようなことであるかを詳細に検討した研究はあまり見られない。Zimmerman & Martinez-Pons (1988)のように、自己調整的活動方略として、プランニングやモニタリングなどの事項を挙げた研究はたしかに存在する。しかし、

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究生

彼らの場合、英語や数学などの学習活動全般を想定しており、文章産出といった特化した領域について検討したものではない。さらに、自己効力感についても、Zimmerman & Bandura (1994)の研究では1因子性が高く、その下位概念が詳細に検討されたとは言い難い。

今後、文章表現教育を行う大学はさらに増加することが予想される。そのため、どのような能力を育成することが必要であるかについての知見の確立は今以上に急務となるであろう。そこで、本研究では、教育の中で育成すべき能力を検討するための第1段階として、自己調整的な側面をもった文章産出活動方略（以下、文章産出活動方略と記述する）、および（文章産出活動における）自己効力感に着目する。そして、文章産出活動方略、および自己効力感を構成する下位活動方略や下位概念についての検討を加える。次に、活動方略と自己効力感がどの程度関連しているのかについても検討を加えることとする。なお、書き手が持つ文章産出活動方略については崎濱（印刷中、2001）で用いた尺度を参考に、28項目から成る質問紙を作成し、それらの事項が全体としてどのような構造を成しているのかを検討する。そして、自己効力感については、Zimmerman & Bandura (1994)が用いた「文章産出活動における自己効力感測定尺度」（以下、「自己効力感測定尺度」と記述する）を用いて、その構造を検討する。

## 方法

**被験者** 大学生・専門学校生152名（男性70名、女性82名、平均年齢23.28歳）

**材料** ①文章産出活動方略測定尺度（崎濱、印刷中、2001を改良）②自己効力感測定尺度（Zimmerman & Bandura, 1994）

**調査時期** 2001年5月～7月

**手続き** 被験者には上記の質問紙（文章産出活動方略尺度および自己効力感測定尺度）を配布した。そして、文章を産出する際に、各々の事項をどの程度実行したり感じたりするかを7件法（1：まったく当てはまらない～7：非常によく当てはまる）で回答するよう求めた（文章産出活動方略尺度の項目はTable 1、自己効力感尺度の項目はTable 2を参照）。

## 結果

### 1. 文章産出活動方略尺度

被験者から得られたデータを基に、逆転項目の処理を行った後、文章産出活動方略が全体としてどのような構造をなしているのかを探るため、因子分析を行った（主

因子法、promax回転）。固有値1.0、共通性0.05、因子負荷量が0.40以上を基準に因子数を決定し、3因子を抽出した。Table 1に結果をまとめた。なお、項目1「漢字をたくさん使わない」、項目17「同じ言葉を何回も使わない」、については、2つ以上の因子に対して負荷量が0.40以上であったため、項目26「文章全体の構成を簡潔にする」、項目23「書く内容の変化に応じて段落分けをする」については、どの因子に対しても負荷量が0.40未満であったため、残余項目とした。

第1因子は、項目14「論点を明確にする」、項目22「文章全体として、まとまりのあるものにする」などの項目が高い負荷量を示した。全体として、文章の伝わりやすさに関連した項目で構成されていることから、「伝わりやすさ」因子と命名した。

第2因子は、項目21「こういうことから知りたいな、と思う順に書いていく」、項目10「比喩やたとえをできるだけたくさん使う」などの項目が高い負荷量を示した。全体として、読み手の興味・関心を意識しているかどうか、ということに関連した項目で構成されていることから、「読み手の興味・関心」因子と命名した。

第3因子は、項目16「難しい言葉をたくさん使う」、項目7「難しい表現をできるだけたくさん使う」が高い負荷量を示した。全体として、文章の簡潔性に関連した項目で構成されていることから、「簡潔性」因子と命名した。

次に、尺度としての信頼性を検討するため、下位尺度ごとに $\alpha$ 係数を算出したところ、第1因子から順に、 $\alpha = 0.92, 0.75, 0.81$ となり、十分に高い値が得られたと判断した。

### 2. 自己効力感尺度

次に、自己効力感尺度について検討を加える。文章産出活動方略尺度と同様、得られた結果を基に因子分析を行った（主因子法、promax回転）。固有値1.0、共通性0.05、因子負荷量が0.40以上を基準に因子数を決定し、3因子を抽出した。Table 2に結果をまとめた。

第1因子は、項目2「書き始める時、あまり困ったと思うことはない」、項目3「文章の書き出しはうまく行く」などの項目が高い負荷量を示した。全体として、文章産出活動そのものに対する効力感を表していると考えられることから、「文章産出活動に対する自己効力感」因子と命名した。

第2因子は、項目5「自分が書いたことを、さらに短く、判りやすくまとめる」、項目23「難しいことでもやさしく伝えることができる」などの項目が高い負荷量を示した。全体として、読み手に対して文章の中身を伝え

Table 1 因子分析結果（文章産出活動方略尺度）

	第1因子	第2因子	第3因子	平均値	標準偏差
14 論点を明確にする	0.86	-0.24	0.10	4.93	1.18
22 文章全体として、まとまりのあるものにする	0.84	-0.07	0.03	4.98	1.14
15 文と文とのつながりに気をつける	0.82	-0.09	0.09	5.15	1.08
2 伝えたいことがらを、ただ並べただけにならないようにする	0.79	-0.17	0.10	4.80	1.08
20 とりあげたことがらは判りやすく表現する	0.68	0.14	-0.14	4.91	1.04
27 書くことがらの順番を並べかえ、全体として内容を一貫させる	0.67	0.06	0.05	4.67	1.18
19 必要最低限のことがらはもらさないようにする	0.65	0.10	0.04	5.55	1.06
8 読み手に対して、内容を正しく伝える	0.64	0.01	-0.13	4.95	0.99
6 読み手に説得力を与えるように、文章を構成する	0.63	0.31	0.11	4.71	1.14
9 読み手が自然に読み進んでいけるような文章にする	0.60	0.09	-0.23	4.88	1.00
3 話がいきなり飛ばない	0.60	-0.10	-0.01	4.47	1.30
13 読み手が見て判りやすい文章表現にする	0.57	0.28	-0.21	4.76	1.12
12 一人よがりの文にならないようにする	0.55	0.27	-0.14	4.56	1.29
4 伝えたいことを読み手にすぐ判ってもらえるようにする	0.53	0.29	-0.23	4.72	1.08
18 主語と述語とのつながりに注意する	0.49	0.30	0.36	4.93	1.23
24* 一文あたりの長さを長くする	-0.43	0.41	0.42	3.09	1.09
21 こういうことから知りたいな、と思う順に書いていく	-0.10	0.77	0.05	3.81	1.18
10 比喻やたとえをできるだけたくさん使う	-0.05	0.56	0.34	3.96	1.31
5 読み手が持っている興味・知識や体験について考える	0.13	0.56	-0.04	3.95	1.34
28 読み手がよく判らないことがらは選ばない	0.02	0.47	-0.37	4.32	1.12
25* 読み手の興味・知識や体験についてはあまり考えない	0.03	-0.70	0.05	4.05	1.22
16* 難しい言葉をたくさん使う	-0.06	0.07	0.84	2.78	1.11
7* 難しい表現をできるだけたくさん使う	-0.01	0.11	0.84	2.83	1.13
11 嫌にならずに読めるような「軽い」文章にする	0.09	0.25	-0.52	3.76	1.21
残余項目					
17 同じ言葉を何回も使わない	0.57	-0.04	0.49	4.61	1.32
1 漢字をたくさん使わない	-0.40	0.07	-0.58	4.70	1.18
26 文章全体の構成を簡潔にする	0.38	0.32	-0.24	4.66	1.03
23 書く内容の変化に応じて段落分けをする	0.36	0.20	0.14	5.29	1.08

\*は逆転項目

ることに対する効力感に関連した項目で構成されていることから、「読み手を意識することへの自己効力感」因子と命名した。

第3因子は、項目16「本などから言葉をかりて、読み手を納得させるようにする」、項目15「長い文章を書く時でも、一番大切な部分の下書きはしっかりと作る」などの項目が高い負荷量を示した。全体として、自分が伝えたいことを明確にすることに関連した項目で構成されていることから、「内容明確化への自己効力感」因子と命名した。

次に、尺度としての信頼性を検討するため、下位尺度ごとに $\alpha$ 係数を算出したところ、第1因子から順に、 $\alpha = 0.86, 0.82, 0.76$ となり、十分に高い値が得られたと判

断した。

### 3. 下位尺度間の関連性についての検討

今度は、下位尺度間の関連性について検討する。被験者の回答結果を基に、各下位尺度を構成する項目への評定値の合計を下位尺度得点とした。そして、下位尺度得点を基に下位尺度間の関連性を検討した結果、文章産出活動方略尺度の「伝わりやすさ」得点については、「読み手の興味・関心」・「簡潔性」、および、自己効力感尺度の「文章産出活動に対する自己効力感」・「読み手を意識することへの自己効力感」・「内容明確化への自己効力感」の全ての下位尺度得点との相関が有意であった。このうち、「簡潔性」との間には負の相関が得られた。

Table 2 因子分析結果 (自己効力感尺度)

	第1因子	第2因子	第3因子	平均値	標準偏差
2 書き始める時、あまり困ったと思うことはない	0.80	-0.02	-0.07	3.07	1.41
3 文章の書き出しはうまく行く	0.79	0.06	-0.11	3.36	1.36
1 課題が出ると、何を書くか、すぐに考えが決まる	0.77	-0.04	0.13	3.51	1.36
17 この先何を書こうか迷っても、乗り越えることができる	0.72	-0.16	0.16	4.26	1.13
14 他の事を考えても、すぐに文章を書くことに戻れる	0.69	0.07	0.00	3.82	1.28
11 書く内容が少ない時も、ふくらませることができる	0.69	0.06	0.00	4.08	1.37
9 大事なことを書く場合、すぐ具体例が思いつく	0.61	0.14	-0.11	4.09	1.33
18 自分が興味のない話題でも文章が書ける	0.60	-0.18	0.16	3.41	1.27
8 まわりが騒がしいなど、じゃまがあっても、文章を書くことに集中できる	0.43	0.09	-0.25	3.64	1.66
5 自分が書いたことを、さらに短く、判りやすくまとめる	-0.06	0.79	0.02	3.81	1.17
23 難しいことでもやさしく伝えることができる	0.09	0.75	-0.22	4.16	1.24
7 多くの読み手が期待しているような文章表現にする	-0.28	0.74	0.05	3.54	1.29
10 判りにくい部分を書きなおして、判りやすくする	-0.01	0.70	0.05	4.88	1.12
4 文章の頭の方で、読み手の興味・関心を引きつけるようにする	0.18	0.68	-0.20	4.33	1.33
6 書く内容を大体メモ書きし、その中から一番伝えたいことをえらぶ	-0.24	0.55	0.37	3.74	1.53
19 長い文章の表現のあやまりを直せる	0.25	0.52	0.10	3.97	1.23
20 下書きした文章を手直しし、より短く、内容がまとまったものにする	0.27	0.50	0.30	4.13	1.31
21 判りにくい文章表現や言葉の使い方が修正できる	0.21	0.48	0.32	4.40	1.23
13 はじめから終わりまで、話の一貫性を保つようにする	0.17	0.42	0.23	4.45	1.34
16 本などから言葉をかりて、読み手を納得させるようにする	0.06	-0.01	0.85	4.24	1.32
15 長い文章を書く時でも、一番大切な部分の下書きはしっかりと作る	-0.09	0.06	0.79	3.85	1.65
12 本などから言葉をかりて、自分の言いたいことを書く	-0.01	-0.10	0.79	4.24	1.28
22 下書きでは、アドバイスをしてくれる人を探せる	0.05	0.12	0.42	3.46	1.56

Table 3 下位尺度間相関

	文章産出活動方略		自己効力感		
	読み手の興味・関心	簡潔性	文章産出活動に対する自己効力感	読み手を意識することへの自己効力感	内容明確化への自己効力感
伝わりやすさ	0.38***	-0.29**	0.31***	0.71***	0.39***
読み手の興味・関心		-0.28**	0.11	0.46***	0.17
簡潔性			0.04	-0.11	0.27**

\*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

また、文章産出方略尺度の「読み手の興味・関心」については、「簡潔性」、および、自己効力感尺度の「読み手を意識することへの自己効力感」得点との相関が有意であった。さらに、「簡潔性」については、自己効力感尺度のうち、「内容明確化への自己効力感」得点との相関が有意であった（結果は Table 3 参照）。

### 考察

本研究の目的は、書き手の文章産出活動方略を構成する下位活動方略、および、書き手の自己効力感を構成す

る下位概念について検討を加え、それらの関連性についても検討を加えることであった。分析の結果、文章産出活動方略としては、「伝わりやすさ」・「読み手の興味・関心」・「簡潔性」の3側面の存在が示された。崎濱（印刷中）でも14項目による調査で同様の下位活動方略の存在を見出しており、本研究の結果は崎濱（印刷中）の結果を支持する方向となった。また、書き手の自己効力感については、「文章産出活動に対する自己効力感」・「読み手を意識することへの自己効力感」・「内容明確化への自己効力感」の3側面の存在が見出された。さらに、

上記6つの下位尺度間の関連性を検討したところ、文章産出活動方略尺度の「伝わりやすさ」得点については他の全ての下位尺度得点と、「読み手の興味・関心」得点については、「簡潔性」や、自己効力感尺度の「読み手を意識することへの自己効力感」得点と、「簡潔性」得点については、自己効力感尺度の「内容明確化への自己効力感」得点との相関が有意であった。これらの結果を踏まえると、Graham & Harris (1997, 2000) が示したように、文章産出の場合も、自己調整的活動方略と自己効力感とが関連していることが考えられる。しかし、必ずしも全ての下位側面どうしが関連するわけではないことも指摘できよう。たとえば、「伝わりやすさ」については他の全ての下位尺度との相関が有意であることから、伝わりやすさを重視する被験者は、他の側面についても重視することが推測される。しかし、「読み手の興味・関心」の側面を重視する被験者の場合、「読み手を意識することへの自己効力感」についてはある程度重視すると考えられるが、その他の側面についてはあまり重視しないことが推測される。

今後はこうした結果を踏まえ、実際に文章表現能力を育成する上で特に重視する必要があるのはどのような側面であるのかについてさらに検討することが求められる。

## 引用文献

- Ferrari, M., Bouffard, T., & Rainville, L. 1998 What makes a good writer? Differences in good and poor writers' self-regulation of writing. *Instructional Science*, 26, 473-488.
- Graham, S., & Harris, K. 1997 Self-regulation and writing: where do we go from here? *Contemporary Educational Psychology*, 22, 102-114.
- Graham, S., & Harris, K. 2000 The role of self-regulation and transcription skills in writing and writing development. *Educational Psychology*, 35, 3-12.
- 向後千春 1996 会議室システムを利用した作文の授業 げんごひょうげん (富山大学言語表現部会1996年度報告書), 4, 36-39.
- 向後千春 1998 言語表現の授業評価1995-1997 げんごひょうげん (富山大学言語表現部会1996年度報告書), 6, 17-26.
- Larkin, J.H., McDermott, J., Simon, D.P., & Simon, H.A. 1980 Expert and novice performance in solving physics problems. *Science*, 208, 1335-1342.
- 崎濱秀行 2001 情報伝達文産出時に書き手が設定する目標とは? -大学生と日本語教育者との比較- 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 586.
- 崎濱秀行 印刷中 書き手のメタ認知的知識やメタ認知的活動が産出文章に及ぼす影響について 日本教育工学会論文誌, 27.
- 筒井洋一 1996 富山大学における表現教育の広がりとその到達段階 げんごひょうげん (富山大学言語表現部会1996年度報告書), 4, 1-10.
- 筒井洋一 1998 大学における表現教育の全国的傾向とその意義~富山大学の「言語表現科目」の実践を通じて~ げんごひょうげん (富山大学言語表現部会1996年度報告書), 6, 10-16.
- 吉倉紳一 1999 全学必修科目「日本語技法」の新設とそのマニュアル作成の経験 大学教育学会誌, 21-2.
- Zimmerman, B.J., & Martinez-Pons, M. 1988 Construct validation of a strategy model of student self-regulated learning. *Journal of Educational Psychology*, 80, 284-290.
- Zimmerman, Barry J; Bandura, Albert. 1994 Impact of self-regulatory influences on writing course attainment. *American Educational Research Journal*, 31(4), 845-862.

(2002年9月30日 受稿)

## ABSTRACT

### The Relationship Between Writing strategies and Self-efficacy in Writing Process

Hideyuki SAKIHAMA

Purpose of this study was to examine (1) sub-processes and subcategories of writing strategies and self-efficacy in writing and (2) the relationship between them in writing process. “Writing strategies” scale and “Perceived Self-regulatory Efficacy for Writing” scale were used in this study. Three factors emerged from “Writing strategies” scale: A) easiness to transmit to readers, B) readers’ interests, C) easiness of words and phrases. Three factors also emerged from “Perceived Self-regulatory Efficacy for Writing” scale: D) efficacy for writing activities, E) efficacy for using easy expressions, F) efficacy for making the content clear. Relationships between subscales (from A to F) were also examined. However, correlation coefficient varied according to subscales: while “easiness to transmit to readers” highly correlated with the rest of subscales, “easiness of words and phrases” only correlated with “efficacy for making the content clear”. Further studies would be required to examine clearly the relationships between writing outcome and them.

Key Words: writing strategies, self-efficacy, relationship between writing strategies and self-efficacy.